

第78回 学術講演会

エキスパートに聞く 新型コロナウイルス感染症の最前線

代表世話人・座長 長崎大学 学長 河野 茂 先生

開催視聴方法 Web開催(ご視聴方法は最終ページ参照)

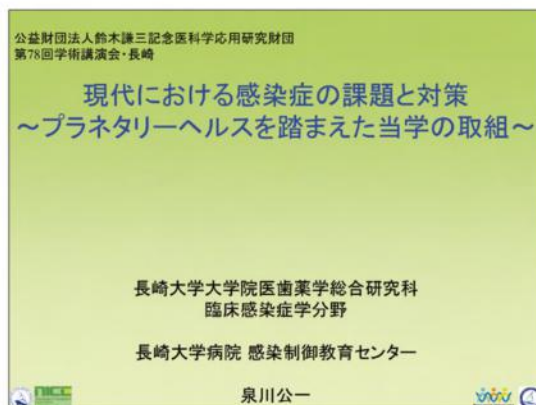
リアル配信 令和3年3月4日(木)18:30~20:30

講演Ⅰ.

「プラネタリーヘルスを踏まえた 当学の取組」

長崎大学副学長
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科
臨床感染症学分野教授
長崎大学病院感染制御教育センター センター長

泉川 公一 先生



講演Ⅱ.

「COVID-19に必要な感染対策 ～クラスター事例から学ぶ～」

愛知医科大学大学院医学研究科
臨床感染症学主任教授

三鴨 廣繁 先生



後援 / 長 崎 県 医 師 会

この講演会は、日本医師会生涯教育認定講座2単位が取得できます。
カリキュラムコード：4(医師-患者関係とコミュニケーション)、8(感染対策)

演題Ⅰ：
「プラネタリーヘルスを踏まえた
当学の取組」

長崎大学副学長
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科臨床感染症学分野教授
長崎大学病院感染制御教育センター センター長

泉川 公一 先生



プロフィール

1994年3月 長崎大学医学部卒業
1994年6月 長崎大学医学部附属病院第二内科入局後、研修
1996年4月 長崎大学医学部大学院臨床検査医学教室
2000年4月 長崎大学医学部附属病院 医員
2000年5月 米国国立衛生研究所(NIH)留学
2003年8月 地方職員共済組合長崎県診療所勤務
2003年7月 国家公務員共済組合連合会 虎の門病院呼吸器センター勤務
2005年4月 長崎大学医学部・歯学部附属病院第二内科 助教
2009年4月 米国国立衛生研究所(NIH)留学
2009年10月 長崎大学大学院医歯薬学総合研究展開医療科学講座(第二内科) 助教
2011年4月 長崎大学大学院医歯薬学総合研究展開医療科学講座(第二内科) 講師
2013年4月～現在
長崎大学病院感染制御教育センター センター長
2014年3月 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 感染免疫学講座 臨床感染症学分野 教授
2017年4月～現在
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 臨床感染症学分野 教授
(組織再編による名称変更による)
2020年10月～長崎大学副学長(新型コロナウイルス感染症対策担当)
現在に至る

受賞：

2010年 日本抗生物質学術協議会奨励賞
2010年 長崎県医学同窓会助成金
2011年 長崎県医師会医学研究助成金
2012年 上田記念感染症・化学療法研究奨励基金
2012年 日本医真菌学会研究奨励賞

演題Ⅱ：
「COVID-19に必要な感染対策
～クラスター事例から学ぶ～」

愛知医科大学大学院医学研究科臨床感染症学主任教授

三鴨 廣繁 先生



プロフィール

1983年3月 名古屋大学文学部卒業
1989年3月 岐阜大学医学部卒業
1989年5月 岐阜大学医学部附属病院 医員(研修医)
1994年3月 岐阜大学大学院医学研究科博士課程修了(医学博士)
1994年4月 岐阜大学医学部附属病院 医員(産科婦人科)
1994年9月 岐阜大学医学部 助手(産科婦人科)
1997年10月 岐阜大学医学部 講師(産科婦人科)
2003年4月～ Channing Laboratory, Harvard Medical School, Research Scholar
2004年3月
2004年4月 岐阜大学 生命科学総合研究支援センター 嫌気性菌研究分野 助教授
2007年4月 岐阜大学大学院 連合創薬医療情報研究科 感染症治療学 准教授
2007年8月～ 愛知医科大学大学院医学研究科 臨床感染症学 主任教授
現在に至る

受賞：

2000年5月 岐阜医学協議会奨励賞
2001年5月 日本化学療法学会上田賞
2001年6月 日本東洋医学会賞
2005年9月 日本臨床腸内微生物学会大島賞
2016年3月 上原記念日本嫌気性菌感染症学会学術奨励賞
2017年3月 上原記念日本嫌気性菌感染症学会学術奨励賞
2019年4月 日本感染症学会二木賞

「プラネタリーヘルスを踏まえた当学の取組」

長崎大学副学長

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科臨床感染症学分野教授

長崎大学病院感染制御教育センター センター長

泉川 公一

2019年末に、中国湖北省武漢から発生した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)のパンデミックは、まさにプラネタリーヘルスを脅かす事態になっている。わが国においては、当初、武漢からの帰国者の感染が問題となっていたが、クルーズ船ダイヤモンドプリンセス号の3700人の乗員乗客の船内検疫と感染拡大、さらに、日本各地で感染者がみられ、2020年冬、第3波を迎え、日本中で感染者が増加している状況にある。

当学は、2月上旬から武漢からの帰国者の感染対策支援を皮切りに、クルーズ船内での感染拡大阻止のために、日本環境感染学会の災害時感染制御検討委員会とも共同し支援を行い、長崎県内では、コスタアトランチカ号の150人にも及ぶクラスター、さらには、医療機関内における感染やクラスターも経験した。

地域の医療の最後の砦となる当学病院においては、地域におけるCOVID-19患者の診療ならびに拡大阻止について中心的な役割をはたす必要があり、現在、院内はもとより、地域の医療機関との連携、感染対策の啓発、さらには、もっともリスクが高いとされる介護・福祉施設における対策にも注力している。さらに、長崎大学としても、予防、診断、治療において、研究活動も併せて行っている。この講演会が開かれる3月には事態が収束していることを希望しつつ、この未曾有の感染症にどう対応してきたか、また、課題はどこに存在したのか、会場の皆さんと共有したい。

「COVID-19 に必要な感染対策～クラスター事例から学ぶ」

愛知医科大学大学院医学研究科臨床感染症学主任教授

三鴨 廣繁

日本国内でも感染経路が明らかでない新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)患者が多く発生し、一部地域ではそれに伴う小規模患者クラスター (集団) が把握されてきた。COVID-19の感染対策の基本は、飛沫感染予防策、接触感染予防策 (環境整備を含む) であることは言うまでもないが、日本では疫学データから日常生活において一人一人が3つの密 (密閉、密着、密接) を避けることの重要性が指摘されてきた。一方、妊婦は細胞性免疫が低下していること、横隔膜挙上に伴う呼吸器の生理学的変化などもあり、COVID-19により状態の悪化も懸念されている。特に、周産期では緊急対応が必要な場合も少なくなく、時間的余裕がないことも多いこと、新生児への対応も考慮する必要があることなどから、迅速かつ慎重な対応が求められている。臓器提供・移植を行う施設においてもCOVID-19に対する対応が急務となっている。特に、移植医療においては、移植患者が免疫抑制下でCOVID-19 が重症化しやすいことのみならず、ドナー由来のCOVID-19の伝播も否定できないことから、生体移植、脳死下・心停止後臓器移植施行や移植後の患者管理で慎重な対応が求められている。